

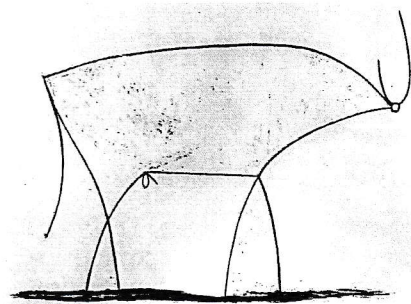
引き算の美学 ～物事の本質を考える～

宮下佳廣

2013年のユネスコ無形文化遺産登録以降、和食は一段と世界的ブームとなっています。以前通っていた料理教室で「和食は引き算、洋食は足し算」と学びました。今回は、この「引き算」の意味を考えてみたいと思います。

和食は、素材から苦味やえぐみ、臭みなど余計な物を取り除き、素材が持つ旨さを際立たせ、その本来の味を楽しむことから「引き算の料理」といわれます。例えば、和食に欠かせない出汁には、出汁を取る、出汁を引くという表現があります。一方洋食は、味付けやソースを楽しむ料理のため、世界各地の香辛料や調味料を混ぜ合わせて加えることから「足し算の料理」といわれています。特に代表的な洋食であるフランス料理ではソースが命といわれ、料理自体がソースの芸術品となっています。絵画に目を向けると、西洋画の油絵や水彩画は塗って重ねるいわゆる足していく技法です。反対に日本画の墨絵は余白が重要な意味を持っており、絵の対象物の本質を表現するために、必要なのはむしろ余白という引き算の考え方が貫かれています。同様に文学の世界では、短歌は31文字、俳句は17文字と世界で最も短い詩形があり、自分の想いを伝える言葉以外はそぎ落としています。日本伝統の武道、茶道、華道にも同様の考え方がみられ、引くという意味は、単なる算数の引き算ではなく、余分なものを削ぎ落とし本来の良さを引き出すという意味が込められており、日本文化の大切な要素として先人の大きな遺産と考えられます。

日本の禅を学んだスティーブ・ジョブズが作らせたアップルの研修プログラムでは、ピカソの描いた「雄牛」を教材にして、 unnecessary部分を徹底的にそぎ落とす「引き算の美学」の大切さを教えています。同様に、日本の時計メーカーシチズンが「時計の本質を見直し、すべてをそぎ落としたシンプルで薄く美しい時計に挑戦」のコンセプトのもと、世界最薄アナログ式 アップル大学教材ピカソの抽象画「雄牛」腕時計（駆動部分厚さ1mm）を今秋発売すると話題になっています。



このような「引き算」の思考を千代田の日常業務に置き換えた時、 unnecessaryなものをそぎ落としたシンプルでわかりやすいプレゼンになっているか、又、部下・後輩の指導・助言を行う上司・先輩は素材（人材）の良さを引き出す努力が十分かをまず考えてみましょう。そして社内の業務報告や書類作成においては、余分な修飾語をそぎ落とした簡潔な内容となっているかを今一度振り返ってみたいと思います。要は、「引き算」とは物事の本質を突き詰めて考えることに他ならないのですから。

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。

がってん
知るから合点、そして行動へ

宮下佳廣

読書の秋です。前々号で紹介した「自分の頭で考える」の続編として、「日本人の叡智（磯田道史著）」から、幕末の政治家横井小楠の思想を、昨今の千代田の事業活動と関連させ考えてみました。

横井小楠は熊本出身の幕末の志士ですが、坂本龍馬のような高い知名度はありません。しかし勝海舟は、その著「氷川清話」の中で、「今までに天下で恐ろしいものを二人みた。それは横井小楠と西郷隆盛であり、横井の思想を西郷の手で行われたら、幕府はもはやそれまでとみていたが、果たしてその通りとなった」と記しています。これほど高い評価を受ける横井小楠の思想・見識の原点は読書法にあったようです。彼は「学問を致すに、知ると合点との異なる処ござ候、専ら己に思うべく候」と述べています。読書は単なる知識習得ではなく、読後にその知識を一度投げ打ち、「自分が思考する入り口」にすべきと説いています。すなわち、本は字引に過ぎず、合点してはじめて身につくものであり、そのためには強い使命感と日頃の問題意識が必要としています。また、小楠の考えに共感した吉田松陰は、知ることと合点の違いに加え、思想を持つだけでなく実践を伴わなければ学問とは言えないと考える「知行合一」を主張し、その影響を受けた多くの志士たちが、明治維新の原動力になっていきました。私たち凡人は、ともすると知ることが耳学問や受け売りになり、合点するレベルまで咀嚼しないまま自分の意見としてしまいがちです。さらに合点しても行動につながらず理論倒れに終わることが多いものです。知ったことを一度投げ出し、納得するまで考え、合点した上で行動に移すところに、横井小楠や吉田松陰の非凡さがあるといえましょう。

昨今の日本経済は、産業界をけん引する自動車業界のトップが「海図なき前例のない戦い」と評するように、AIを始めとする技術革新により大きな変化が予想されます。このような中、千代田の事業活動において「知行合一」ともいえる動きが見られます。その一例が、営業所からの発案を経営企画部門がフォローし、大学と共同研究を進める活動です。現場の問題点を知ることから始まり、大学の研究者と相談しながら合点し、機器の開発を試行する展開になっています。この取り組みは、千代田の経営方針にある新しい価値の創造が実践されている好例です。

秋の夜長、今下期は、皆さんも横井小楠の読書法に倣い知ることから合点し、そして行動に移していかれることを期待しています。

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。

「教える」から「引き出す」へ
～上下の結節点としてのコーチング～

宮下佳廣

スポーツの分野で指導者として使われている「コーチ」という言葉が、近年ビジネスの世界でも「コーチング」として広く用いられるようになっていきます。今回はその背景と「コーチング」の基本について考えてみました。

コーチは英語の馬車(coach)が語源であり、そこから人を目的地まで運ぶ、さらに転じて人を指導するという意味になったと言われています。ビジネスでコーチングが人材育成のスキルとして活用されるようになった背景には、企業を取り巻く環境変化や急速な技術革新があります。激変する経営環境下で、組織のパフォーマンスを上げていくためには、個の能力を最大限に高めることが求められます。そのため指導者の役割が、従来の教える、指示命令をすることではなく、社員の自主性や能力を引き出すことになってきました。具体的には、社員の話を聞く傾聴やその中から答えを引き出す問いかけなどの手法です。企業ではトップマネジメントの経営方針にそいながら部下の育成をはかる中間管理職が、スポーツの分野では監督を支えチームの勝利に貢献するために選手を育てるコーチが、上下の結節点として重要な役割を担っています。

私自身、中間管理職の中でも人事課長時代の出来事が印象に残っています。当時、教育担当の社員から管理職研修に海外の手法を導入したいという提案が出されました。事前に副工場長や現場の課長から、それは是非やってほしいとの賛同を得て準備を進めていたところ、工場長から「この研修は、社風に合わないのではないか」との反対意見が出されました。今回の研修と社風の整合性について発案した担当社員と何度か議論を重ね、その結果を2回、3回と工場長に説明しましたが了解を得られませんでした。落胆する社員を励まししながら5回目の説明に行った時、工場長は終わりで話を聞かずに「君の話はわかった、やりなさい」といつてくれたのです。同行した社員も大きな自信をもってその後の研修を進めてくれました。十数年ぶりに出会ったその時の後輩との昔話から、当時の工場長と私、そして部下との間に、厚い信頼関係がベースにあったことを再確認し、良き思い出がさらに深められたことでした。

千代田は「逆三角形の組織風土づくり」を掲げています。この実現のためには、新入社員から経営陣までの社内全体に信頼感があることを土台に、上下の立場や考えを理解しながらコミュニケーションを図っていく部門長や営業所長の結節点としての役割や働きがますます重要になってくると思います。

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。

社会的時間を増やす ～サル化しないために～

宮下佳廣

鎮守の森活動の提唱者である広井教授が京都大学に移られた縁で、ゴリラ研究の世界的権威である京都大学山極総長の講演を聞く機会がありました。そのお話から、ゴリラ社会からみた現代の人間社会の問題点を考えてみたいと思います。

山極先生は、ヒトはサルからゴリラ、そしてホモサピエンスと進化したにもかかわらず、現代は、むしろサル社会に退化してきていると警鐘を鳴らしています。サル社会には典型的な階級制があり、エサを取る順番がボス猿の次に大人のオスザル、そして若いオスザルと決まっています。ボスザルのそばにいるメスザルと子ザルは優先的にエサがあり、若いオスザルはエサにありつけないこともあり、強いものが独り占めする格差の世界となっています。一方、ゴリラは互いの顔が確認できる距離に集まって食べ物を分かち合い、相手の気持ちを理解することができます。サル社会では、目を合わせると喧嘩になるので食べる時は分散するのです。サルの「個食」に対し、ゴリラは「共食」といえます。現代の若者たちは、コンビニ弁当を一人で食べることが習性になっているといわれ、まさにサル社会の個食がはびこっています。



地方の人たちとの鎮守の森活動の中で、同じ働くという意味の言葉に二つの用い方があることに気づきました。生活の糧を得る労働は「稼ぎ」といい、村人総出での草刈り、山道の整備、祭りや伝統芸能等を行う事を「仕事」という違いです。都会に住む私たちは、利害得失・効率優先・利便性を常に意識した中で働き、地方でいう稼ぎの時間に偏った生活をおくっているといえましょう。このような時間を「経済的時間」とよぶのに対し、地方の仕事にみられるような、仲間と自分の時間を共有しながら信頼を高めていく時間を「社会的時間」といいます。現代社会は、経済的時間によって多くの敵意と格差を生みだし孤独な人たちが増えています。そのため社会的時間を増やし、ヒトが本来営んできた生活に立ち返りたいものです。私たち鎮守の森活動の目指す姿もそこにあります。

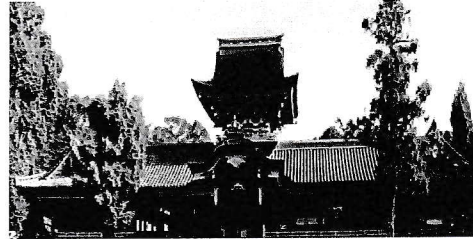
同じ釜の飯を食うと言うように、まず家族、友人と顔を合わせて話や食事をする時間を多く作ることが社会的時間を増やす第一歩です。そして新たな出会いにも挑戦してみましょう。多くの人たちと触れ合い理解を深めることは自分の成長にもつながります。パソコンやスマホ等のデジタル機器から離れ、リアルな体験を心がけること、たとえば、自然に親しむこと、趣味や創作活動、読書等も、皆さんの社会的時間を増やすお勧めアイテムです。

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。

社員の目が輝き続ける千代田へ！ ～長寿企業への永い道～

宮下佳廣

先般、京都八幡市にある石清水八幡宮へ詣でました。当宮は、日本三大八幡宮の一つとして、伊勢神宮に次ぐ高い社格があります。平成 28 年には、古代からの荘厳な社殿と近世的な装飾を兼備した神社建築として国宝に認定されています。今回は、権宮司（宮司に次ぐ位）の案内で、その由緒と歴史を解説していただきました。この社殿で、平清盛が神楽を舞い、織田信長が黄金の雨どいを寄進し、徳川家光が造営したとのお話しから、まさに平安時代から江戸時代にかけての歴史絵巻をみる思いがしました。経済人でも松下幸之助や出光佐三が熱心な崇敬者であったこともお聞きしました。帰りに頂いた石清水八幡宮神託のお札に「世は変われども神は変わらず」と記されており、変わらないもの、永く続くものにこそ本物があることを教えられました。



国宝 石清水八幡宮社殿

日本は世界最多の長寿企業（創業 100 年以上）の国です。「長寿企業のリスクマネジメント（後藤俊夫監修）」によると、長寿の秘訣は、次世代へ継承する強い意志とそれを支える日本的価値観にあると指摘しています。価値観の要素として、共同体意識、文化的相対主義と向上心の三つの要素が挙げられ、それは神道、仏教、儒教に根差しています。「三方良し」の考え方に表れている共同体意識は、和の精神が特徴です。他者の受容と変化への柔軟な対応としての文化的相対主義は、伝統の継続と革新のバランスである不易流行に表されています。それに加えて求道心、良きものへの追及に見られる向上心があります。このような神仏儒に基づく日本的価値観は、江戸時代まで日本人の生活、文化に広く浸透していて、いわば生活習慣として根付き、それが長寿企業の DNA として今日まで受け継がれてきていると思われます。

千代田は再来年創業 70 周年を迎えます。人生も「古希」と呼ばれるように、70 年間もの間継続していくことは稀有なことです。これもひとえに今日に至るまでの多くの先人達の努力と功績の賜物と感謝しなければなりません。私が 5 年近くの千代田の皆さんとのかかわりの中で最もうれしかったことは、お客から千代田の社員は目が輝いているとの声があると聞いたことです。混迷を極める現代において、待ち受ける試練を乗り越えるためには、「社員の目が輝き続ける千代田へ！」となっていくことが、何よりも肝要ではないでしょうか。

本年も長寿企業へと続く永い道をしっかり踏みしめ、確かな歩みを進める一年として参りましょう。

Rome was not built in a day（ローマは一日にしてならず）。

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。